

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和5年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第6号（9月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海などへの汚染防止)
(養蚕，養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

令和5年度 病虫害発生予報 第6号

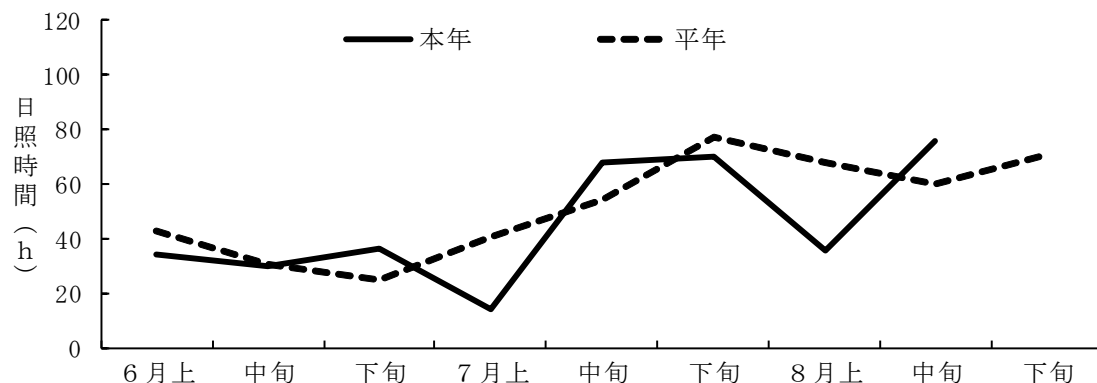
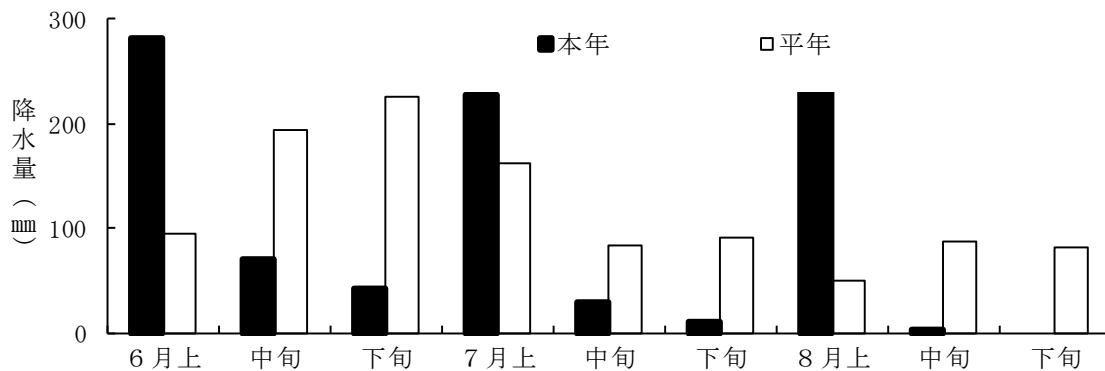
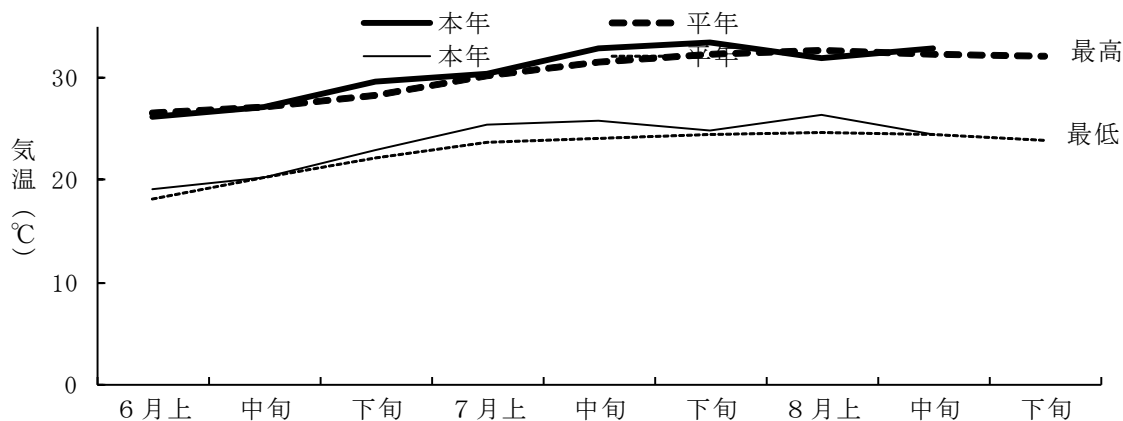
令和5年8月30日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（8月26日から9月25日） 令和5年8月24日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	30	60	九州南部，奄美地方とも，気温は高く，降水量は平年並みか多く，日照時間は平年並みか少ない見込み。
	奄美地方	10	40	50	
降水量	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	20	40	40	
日照時間	九州南部	40	40	20	
	奄美地方	40	40	20	

II. 6～8月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	普通期水稻	いもち病（穂いもち）	少	少
		紋枯病	やや少	やや少
		トビイロウンカ	やや少	並
	サツマイモ	ナカジロシタバ	多	多
野菜	イチゴ（苗床：子苗）	炭疽病	やや少	やや少
		ハダニ類	並	並
	サトイモ	疫病	並	やや多
花き	キク	黒斑病・褐斑病（県本土：施設）	やや多	やや多
		ハダニ類（県本土：施設）	やや多	やや多
		アザミウマ類（県本土：施設）	多	多
作物・野菜・花き共通		ハスモンヨトウ	やや少	並
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		黒点病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	多	多
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
茶樹	チャ	炭疽病	並	並
		網もち病	やや少	やや少
		チャノコカクモンハマキ	並	並
		チャハマキ	並	並
		チャノホソガ	やや多	やや多
		チャノミドリヒメヨコパイ	やや多	多
		チャノキイロアザミウマ	やや多	多
		カンザワハダニ	やや少	並
		クワシロカイガラムシ	やや少	やや少

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 普通期水稻

(1) いもち病 (穂いもち)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少

葉いもちの発生ほ場率17% (平年38%)

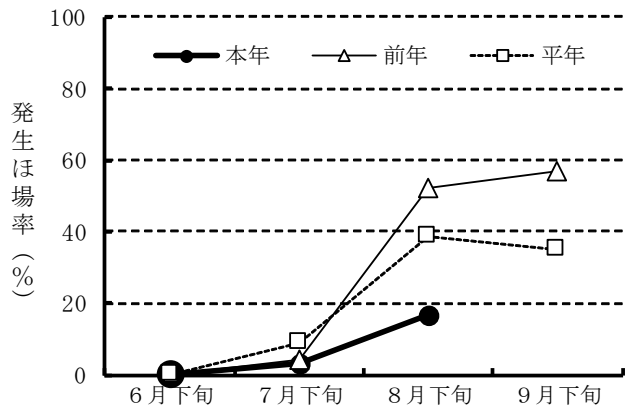
：低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 稲の葉に朝露が長く付着するような

山間部等で葉いもちの発生が多いほ場

では、穂揃期に液剤又は粉剤で補完防除を行う。



いもち病の発生ほ場率 (普通期水稻)

(2) 紋枯病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率9% (平年17%)：やや低い

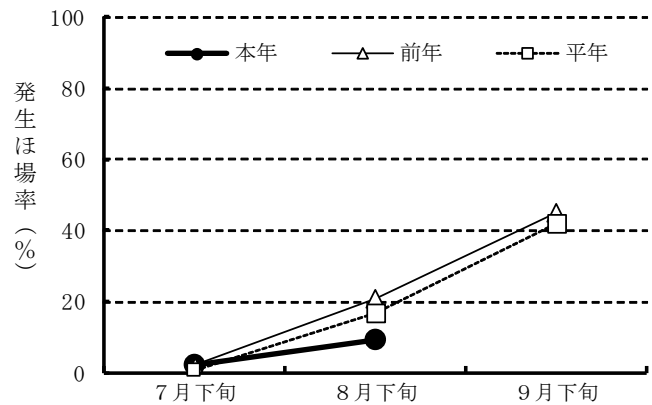
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 現在発生が認められているほ場で出

穂後も病勢が進展する場合は、早急に

液剤又は粉剤で防除する。

(イ) 昨年多発したほ場では、特に注意する。



紋枯病の発生ほ場率 (普通期水稻)

(3) トビイロウンカ (令和5年度技術情報第11号 (8月29日付け) 参照)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

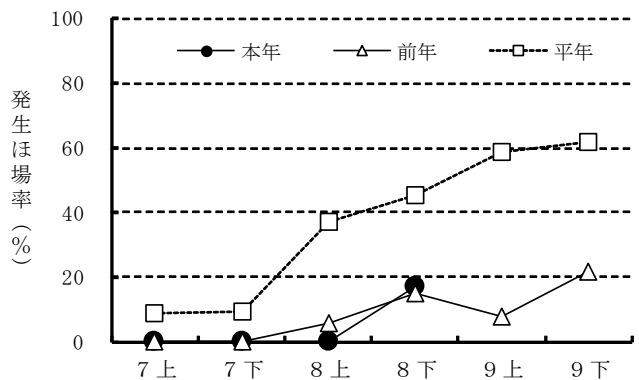
発生ほ場率17% (平年46%)

：やや低い (-)

一部ほ場で短翅型雌成虫が発生：(+)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

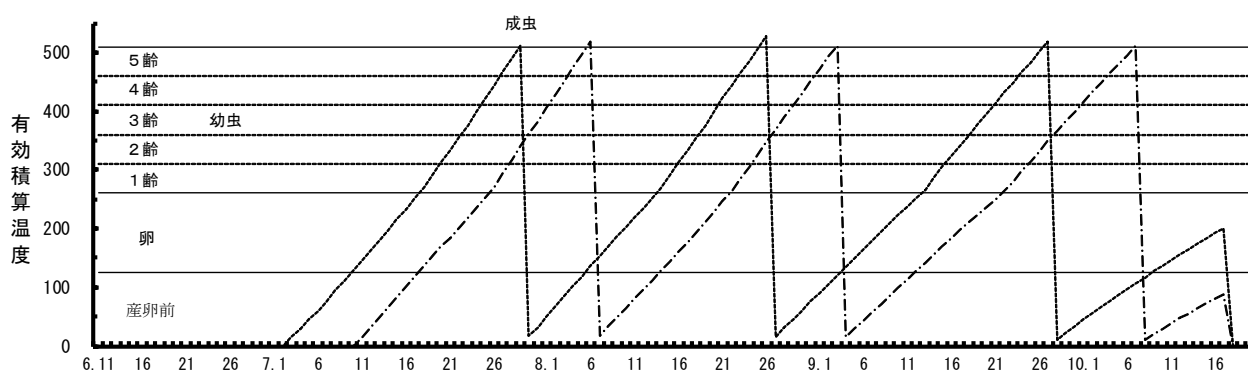


トビイロウンカの発生ほ場率 (普通期水稻)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 9月以降に出穂期を迎える「あきほなみ」など中～晩生品種では薬剤を選定し、効果的な防除に努める。
- (イ) 防除適期は金峰町での7月2日の飛来に由来する第3世代幼虫が9月13～20日頃、7月10日の飛来に由来する第3世代幼虫が9月22～30日頃、さつま町での6月19日の飛来に由来する第3世代幼虫が9月5～11日頃と予想される(図1)。
- (ウ) 育苗箱施用剤を用いた水田でも生息密度が急激に高まる恐れがあるので注意する。
- (エ) 稲の株元に生息しているのので、粉剤や液剤で防除する場合は、薬剤が株元に十分届くよう散布する。
- (オ) 発生状況は地域やほ場によって異なり、同一ほ場内でも生息分布にムラがあるので、ほ場全体の発生状況を必ず確認し、防除する。

トラップ地点：金峰町



トラップ地点：さつま町

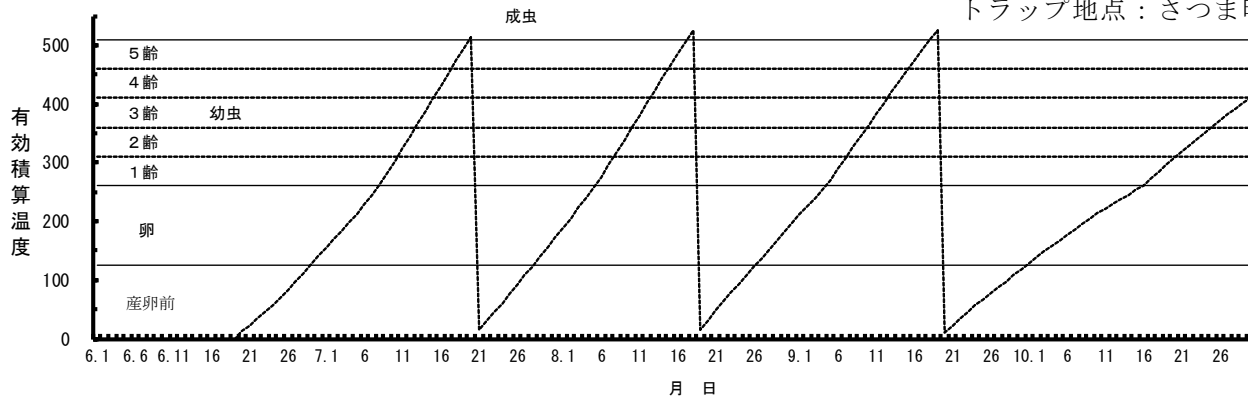


図1 トビイロウンカの有効積算温度による発生経過予測図

注) 気温は、アメダスポイントデータを利用した(8/23まで実測値、8/24から平年値)。
 なお、気温の低い地域では予測より2～4日程度遅くなる。

2. サツマイモ

(1) ナカジロシタバ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率89%（平年56%）：高い（+）

(イ) 気象予報

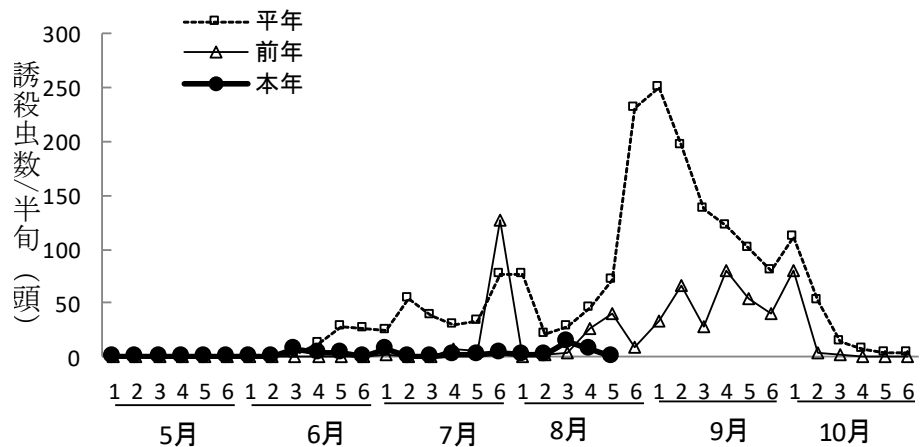
気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢幼虫が多くみられる時期に防除する。

(イ) 薬剤散布後も幼虫の発生量が多い場合は、追加防除を行う。

(ウ) ハスモンヨトウの発生が見られる場合は、同時防除が可能である。



糖蜜トラップでのナカジロシタバの誘殺状況（農業開発総合センター大隅支場データ）

※ 本年8月4半旬は21日までの合計で、平年はH25～R4の平均。

Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ（苗床：子苗）

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率10%（平年20%）

：やや低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

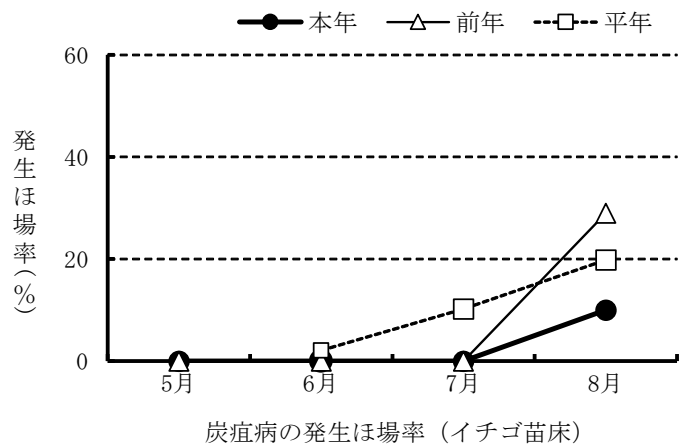
(ア) 萎凋した苗は発病している可能性

があるため、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。また、それらに隣接している株も併せて処分する。

(イ) 早めにランナーから切り離し、過湿とならないように適切な水管理に努める。

(ウ) 薬剤による予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率50%（平年42%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

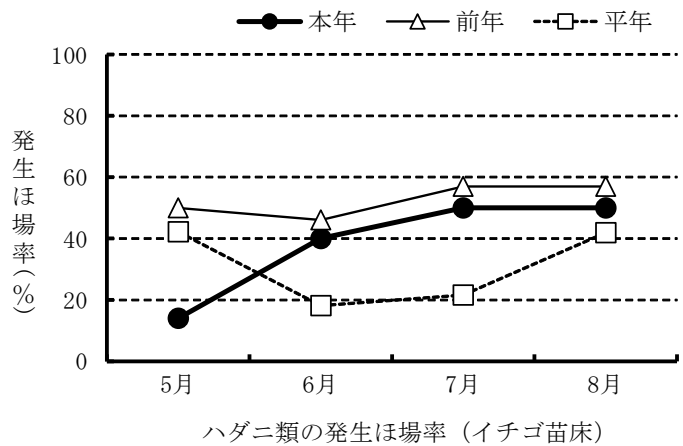
(ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

(イ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(ウ) 薬剤によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する

（令和4年度技術情報第9号（11月29日付け）参照）。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 50% (平年72%)

：やや低い (-)

発生程度の高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

降水量：平年並みか多い (+)

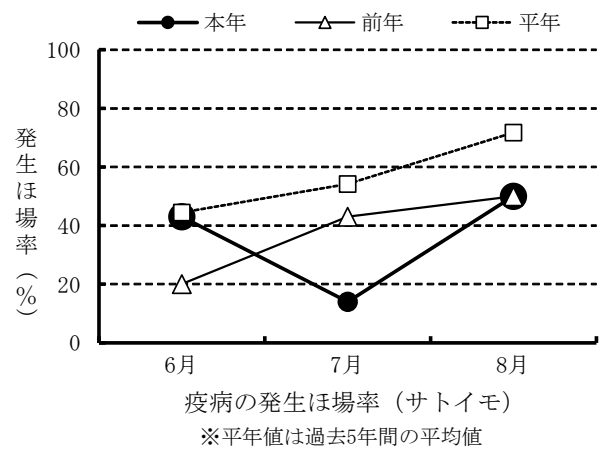
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ほ場の額縁部分で発生しやすいため、ほ場周辺をよく見回り、早期発見に努める。

(イ) 台風や継続した降雨によって、急激に発生が拡大する。特に台風後はほ場の見回りを行い、発生を確認したら直ちに治療効果のある薬剤を7日間隔で複数回散布し、防除を徹底する。

(ウ) 発病茎葉は発生源になるので、早めに摘み取ってほ場外へ持ち出し、適正に処分する。

(エ) 収穫後のくずいも・親いも等の残渣は、ほ場や周囲に残ると発芽して翌年の発生源となるので、ほ場外へ持ち出し適正に処分する。また、茎葉等の残渣は早めにすき込み分解させる。



Ⅲ. 花き（キク）

(1) 黒斑病・褐斑病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率20%（平年4%）

：高い（+）

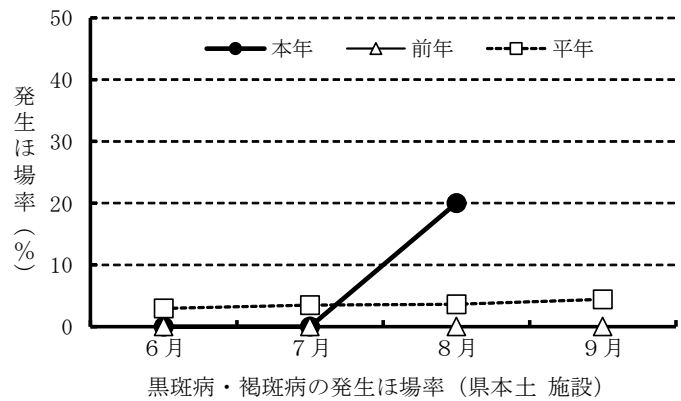
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 母株の薬剤防除を行い、採穂からの病原菌の持ち込みに注意する。

(イ) 通風採光及び排水に努め、かん水は土が跳ね上がらないようにする。

(ウ) 被害葉を早めに除去する。

(エ) 肥料切れ、窒素過多にならないよう適正施肥に努める。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率50%（平年41%）

：やや高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

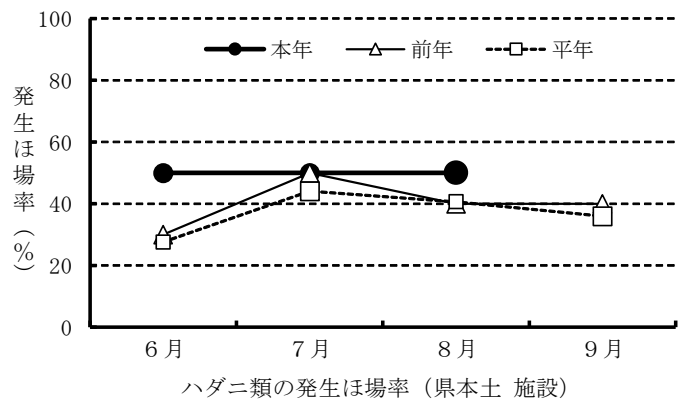
(ア) 出入口や前作での発生場所近く等

でスポット状に発生する場合が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残渣等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率50%（平年36%）

：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(TSWV)、キク茎えそ病(CSNV)を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見および早期防除に努める。

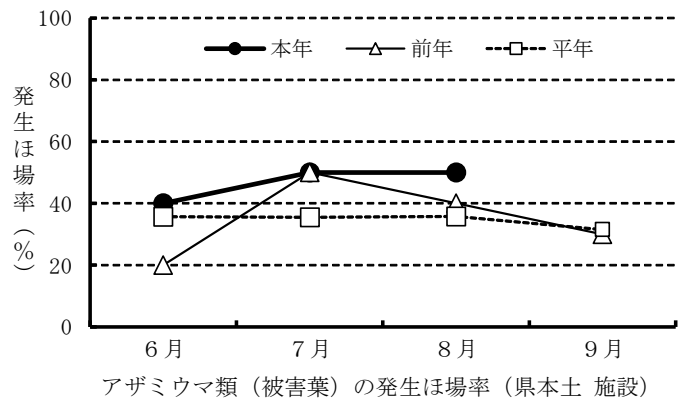
(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) クロゲハナアザミウマは中下位葉にも寄生しているため、薬剤は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(オ) 施設では開口部に目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。発生動向を把握するためには出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

(カ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生に注意する。



IV. 作物・野菜・花き共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 対象作物 サトイモ、イチゴ、キク等、根深ネギ、キャベツ、ダイズ、サツマイモ

(ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

作物名	発生ほ場率 (%)		概 評
	本年	平年	
サツマイモ	0	3	やや少
ダイズ	50	60	並
イチゴ	0	12	やや少
サトイモ	36	78	少
キク	0	3	やや少

フェロモントラップ誘殺数：並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

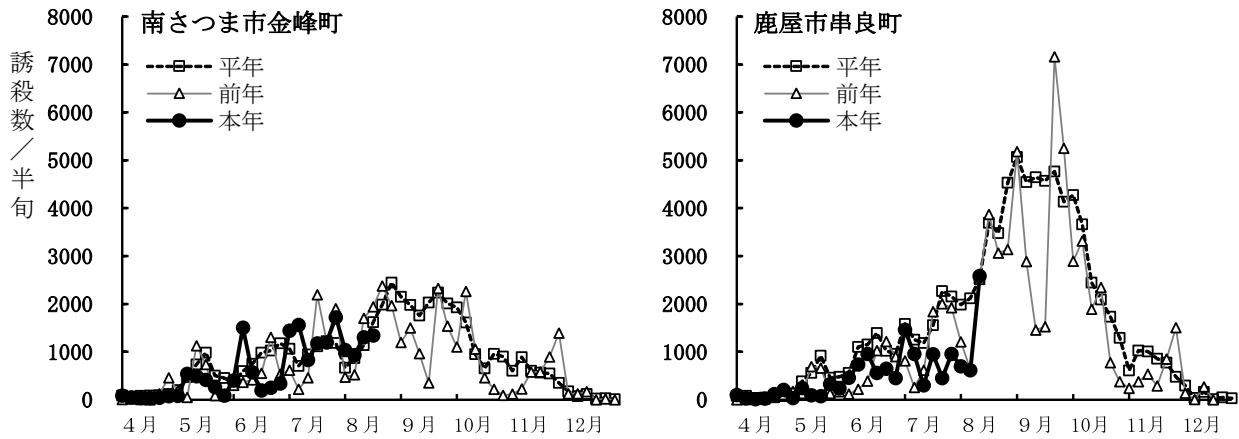
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生状況は作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り幼虫の発生状況を確認する。

(イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害するので、発生の目安にする。

(ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。

(エ) 中・老齢幼虫になると薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況

V. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) 並

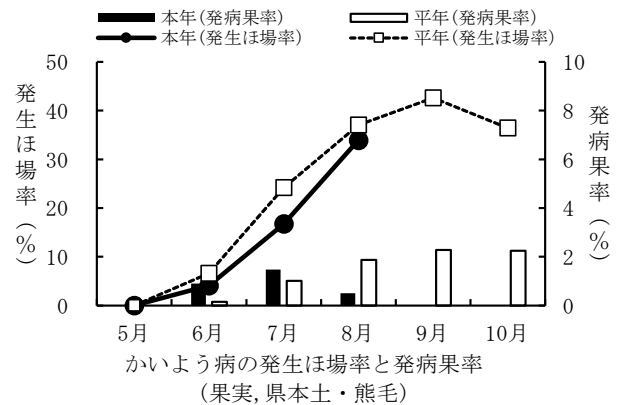
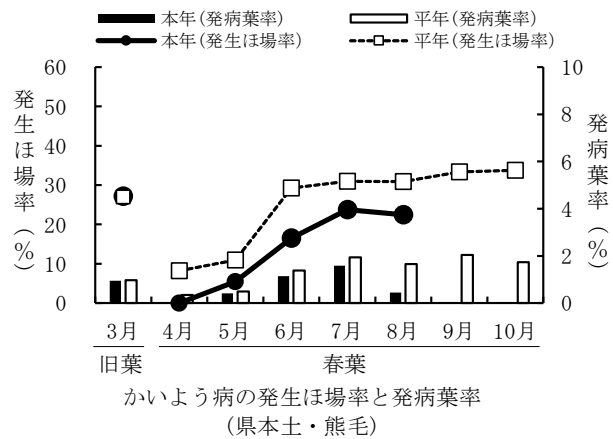
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	並
発生ほ場率	22% (平年 31%) : やや低い (-)	34% (平年 37%) : 並
発病率	0.4% (平年1.7%) : 低い (-)	0.5% (平年1.9%) : 低い (-)



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	0% (平年 4%) : 並	14% (平年 20%) : 並
発病率	0% (平年0.04%) : 並	0.1% (平年0.4%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除を徹底する。

(イ) 台風の前風被害により発生が助長されるので、台風前の防除を徹底する。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 29% (平年 40%)

: やや低い (-)

発病果率 0.8% (平年 7.3%)

: やや低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率 14% (平年 1%) : 高い (+)

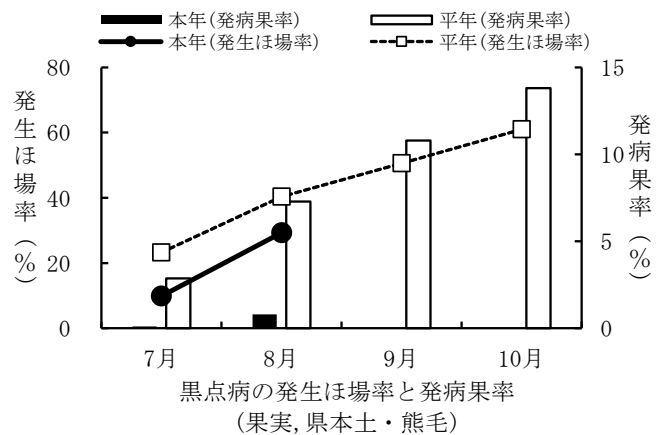
発病果率 0.3% (平年 0.01%) : 高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 9月の秋雨で発生が助長されるので、多雨が予想される場合には予防散布を行う。

(イ) 薬剤の残効は降水量と散布後日数の影響を受ける。このため、次回の散布は累積降水量250～300mmに達する時期を目安に行う。ただし、累積降水量がこれより少なくても1か月程度経過したら次の散布を行う。

(ウ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 23% (平年 26%)

: 並

寄生葉率 5.4% (平年 4.4%)

: 並

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量：並

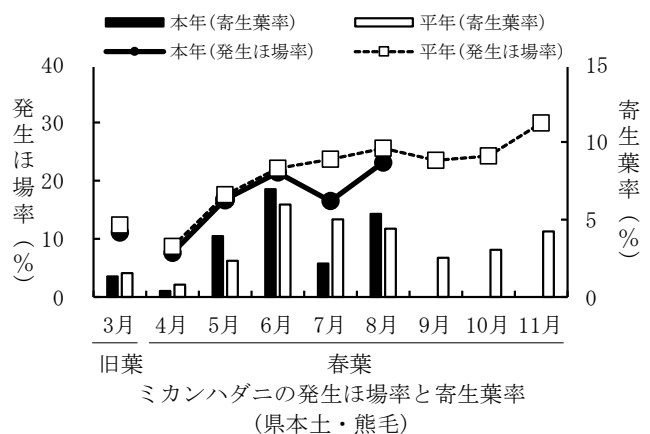
発生ほ場率 0% (平年 6%) : 並

寄生葉率 0% (平年 0.4%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5～1.0頭(寄生葉率で30～40%)を目安に防除する。

(イ) 同一系統薬剤の使用は年1回とし、葉裏までかかるように丁寧に散布する。



(4) 果樹カメムシ類 (ツヤアオカメムシ, チャバネアオカメムシ)

(令和5年度技術情報第10号(8月18日付け)参照)

(令和5年度発生予察注意報第2号(8月25日付け)参照)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量: 多

ヒノキ球果での寄生虫数

チャバネアオカメムシ 3.7頭/5枝 (平年1.4頭/5枝)

ツヤアオカメムシ 0.1頭/5枝 (平年0.1頭/5枝)

ヒノキ球果の口針鞘数(吸汁痕数) 13.9本/果 (平年10.8本/果)

予察灯(4か所)での誘殺数の動向 8月中旬頃から出水市, いちき串木野市および南さつま市でチャバネアオカメムシが多く誘殺された。

表 ヒノキ球果での寄生虫数(8月後期) (単位: 頭/5枝)

調査年	チャバネアオカメムシ			ツヤアオカメムシ		
	幼虫	成虫	計	幼虫	成虫	計
本年	0.6	3.1	3.7	0.0	0.1	0.1
平年	0.2	1.2	1.4	0.0	0.1	0.1

表 ヒノキ球果での口針鞘数(吸汁痕数)の推移(単位: 本/果)

調査年	7月		8月	
	前期	後期	前期	後期
本年	0.7	3.1	8.2	13.9
平年	0.4	2.8	6.9	10.8

注1) 8月後期の口針鞘数(本/果)は, 南さつま市:6.3, いちき串木野市:19.76, 阿久根市:15.6, 出水市①:23.8, 出水市②:15.4, さつま町:13.8, 霧島市:6.8, 曾於市:9.8。

2) カメムシがヒノキ球果から離脱する目安は, 口針鞘数25本/果。

誘殺虫数
(頭)

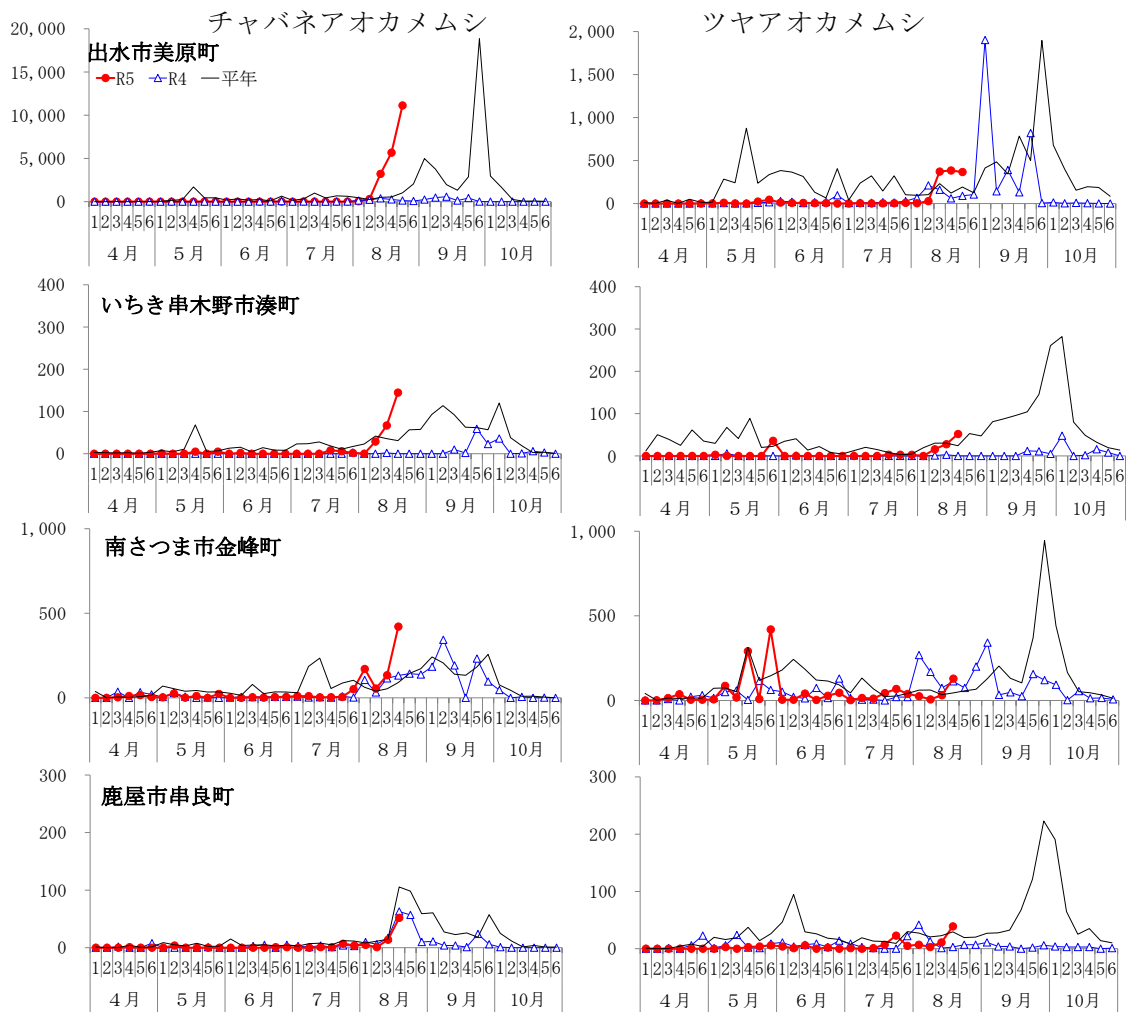


図 予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 果樹園への飛来は地域により異なり、園内でも偏りがあるので注意深く見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。
- (イ) 今後、ヒノキ球果への吸汁加害が進み餌として適さなくなった場合や、台風の接近で球果が落果すると、餌不足となった成虫が果樹園に飛来することがあるので注意する。

防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) ゴマダラカミキリ

- ア 成虫の活動がにぶい朝夕の時間帯に捕殺する。
- イ 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。
- ウ 幼木の主幹地際部を物理的に遮断（ストックカバー法）すると、成虫の産卵を防止できる。

(2) サビダニ類

- ア 昨年多発したほ場では発生する機会が多いので、防除に努める。
- イ 秋季以降も果実上で加害し続けるので、被害果を認めたら直ちに防除する。

(3) 果実吸蛾類

果実吸蛾類は果実を吸汁・加害し腐敗落果させる。夜間に活動し果皮の薄いカンキツに集まりやすい。

- ア 網目0.5～1.0cmの防蛾網で被覆する。
- イ 幼虫の食草となるアケビ、ムベ、アオツツラフジ等を極力除去する。
- ウ 毎年、被害が多いほ場では、ほ場全体が2Lux以上の明るさになるように蛍光灯を集団点灯する。

VI. 茶 樹

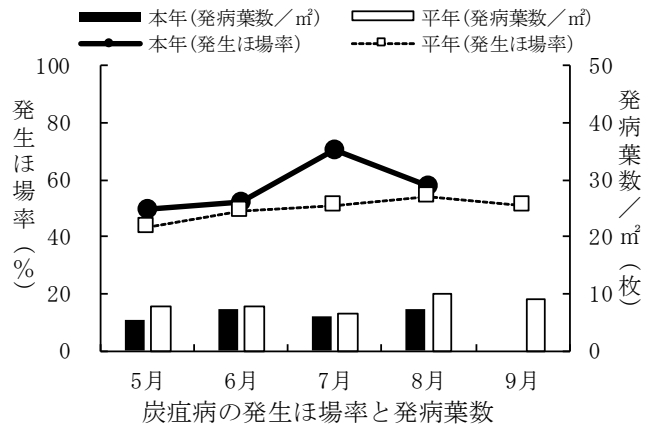
(1) 炭疽病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率58%（平年54%）：並
1㎡当たり病葉数7.3枚（平年10.0枚）
：やや少



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 萌芽～1葉期に予防剤を散布したほ場では、3～4葉期に治療剤を散布する。
- (イ) 萌芽期～1葉期に予防剤を散布していないほ場では、2～4葉期に予防剤と治療剤の混用散布を行う。
- (ウ) 伝染源の病葉が少ないほ場でも、長雨により多発する恐れがあるので防除を行う。

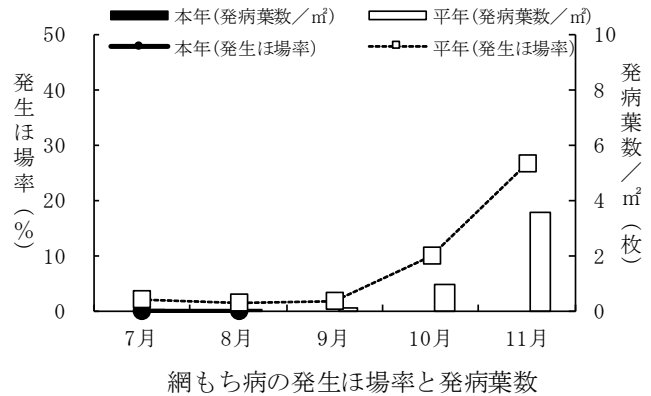
(2) 網もち病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率0%（平年1%）：並
1㎡当たり病葉数0.0枚（平年0.06枚）
：やや少（－）



7月の越夏病葉の発生ほ場率
0%（平年2%）：やや低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病の感染は新葉に限られ、秋芽生育期に多湿条件が続くと多発する。
- (イ) 炭疽病との同時防除が可能である。
- (ウ) 炭疽病には強いが網もち病には弱い品種では防除に注意する（下表参照）。
- (エ) 更新園であっても、周辺に発生ほ場があると発病する恐れがあるので防除を行う。
- (オ) 常発園では、秋芽生育期後半に銅水和剤による追加防除を行う。

表 県奨励品種の炭疽病と網もち病の耐病性

		炭疽病 <small>(注1)</small>			
		弱	中	やや強	強
網もち病 <small>(注2)</small>	弱	やぶきた	あさのか	あさつゆ かなやみどり	
	中				
	強				ゆたかみどり
	不明	おくみどり	さえみどり はるもえぎ	くりたわせ はるみどり	

注1) 炭疽病は茶大百科 I 主要品種と栽培特性より引用

2) 網もち病は、江塚、1958を一部改変

(3) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域	県本土	
(イ) 発生量	チャノコカクモンハマキ	並
	チャハマキ	並
(ウ) 発生時期	チャノコカクモンハマキ	並
	チャハマキ	並

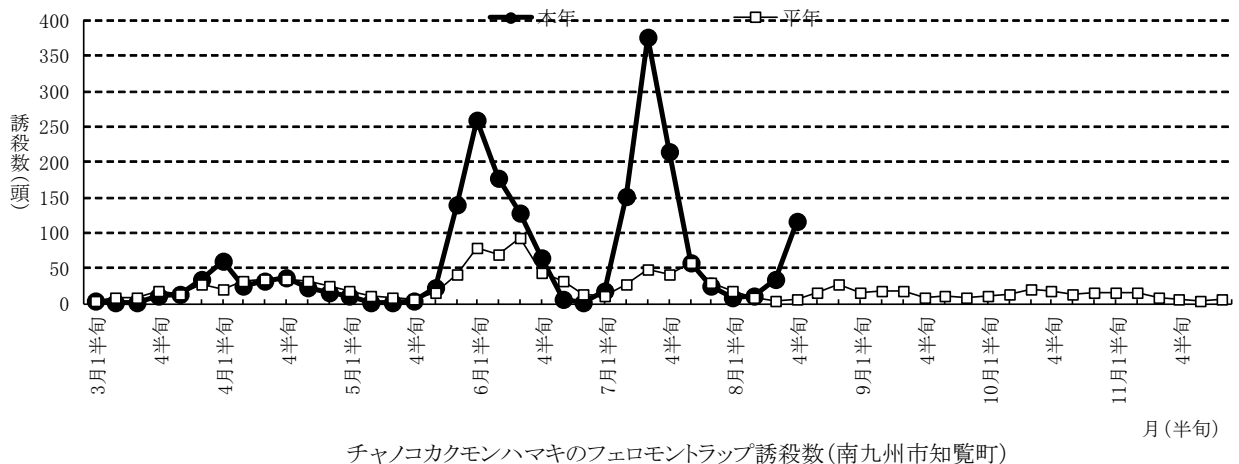
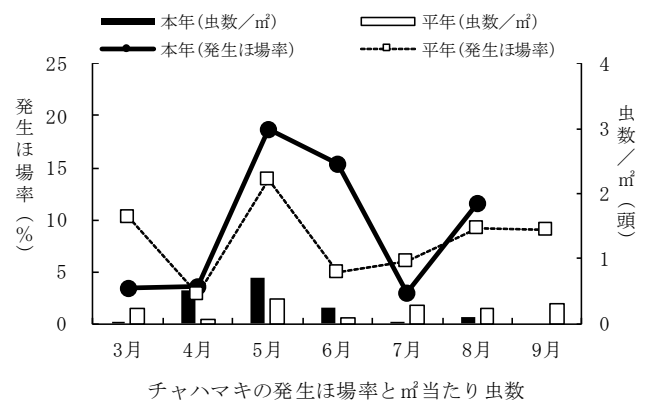
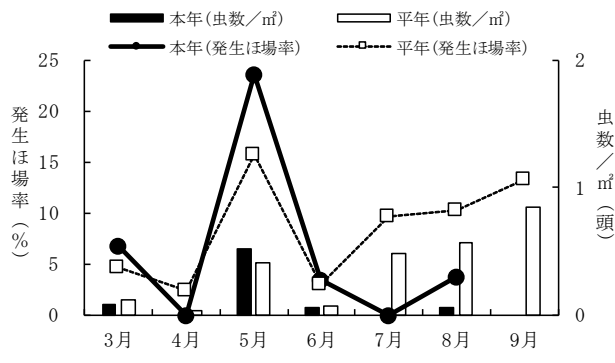
イ 予報の根拠

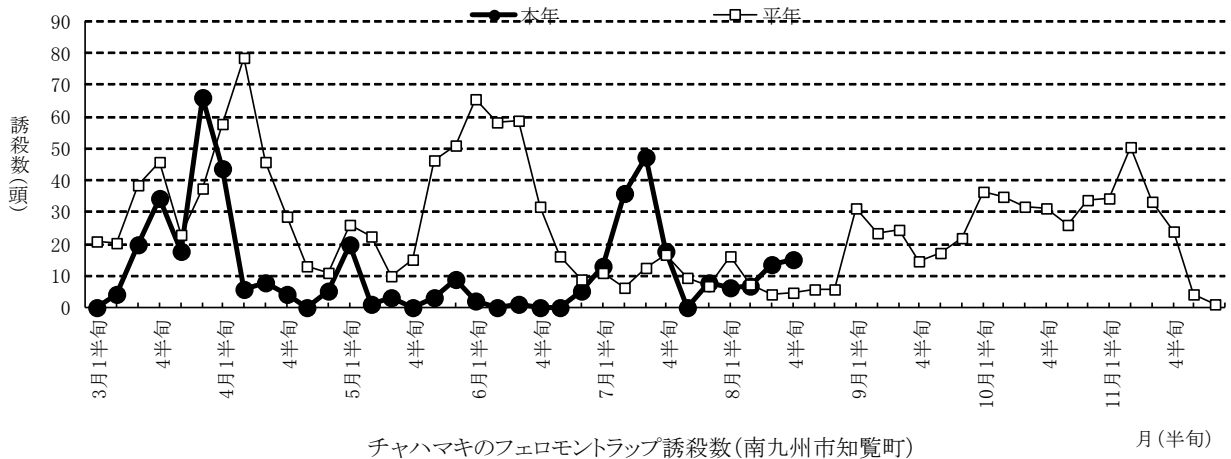
(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
発生量	並	並
発生ほ場率	4% (平年 10%) : 低い (-)	12% (平年 9%) : 並
虫数 (1㎡当たり)	0.1頭 (平年0.6頭) : 少 (-)	0.11頭 (平年0.2頭) : やや少 (-)
＜南九州市知覧町フェロモントラップ＞		
誘殺数 (7月1半旬~8月4半旬)	1,014頭 (平年250頭) : 多 (+)	164頭 (平年 94頭) : 多 (+)
第2世代の発蛾ピーク	並	並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 薬剤防除を行う場合, 防除適期はふ化~2 齢期 (発蛾最盛日の10~15日後) である。
- (イ) チャハマキは, 夏期より秋期に発生が多い傾向にあるので発生に注意する。





(4) チャノホソガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域

(イ) 発生量 やや多

(ウ) 発生地域 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 30% (平年23%)

：やや高い (+)

m²当たり巻葉数 2.3枚 (平年1.9枚)：並

<南九州市知覧町フェロモントラップ>

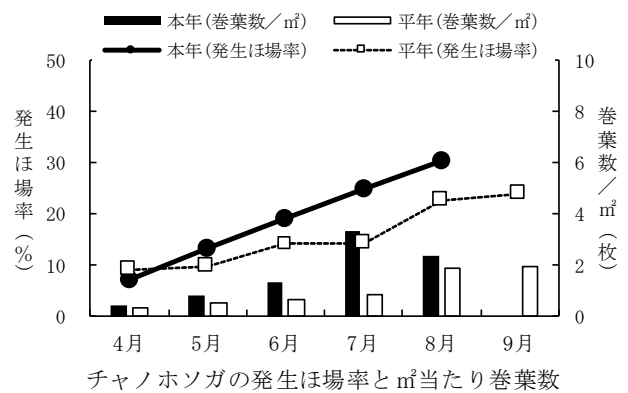
誘殺数 (7月1半旬~8月半旬)：3,849頭 (平年4,859頭)：並

第3世代の発蛾ピーク：並

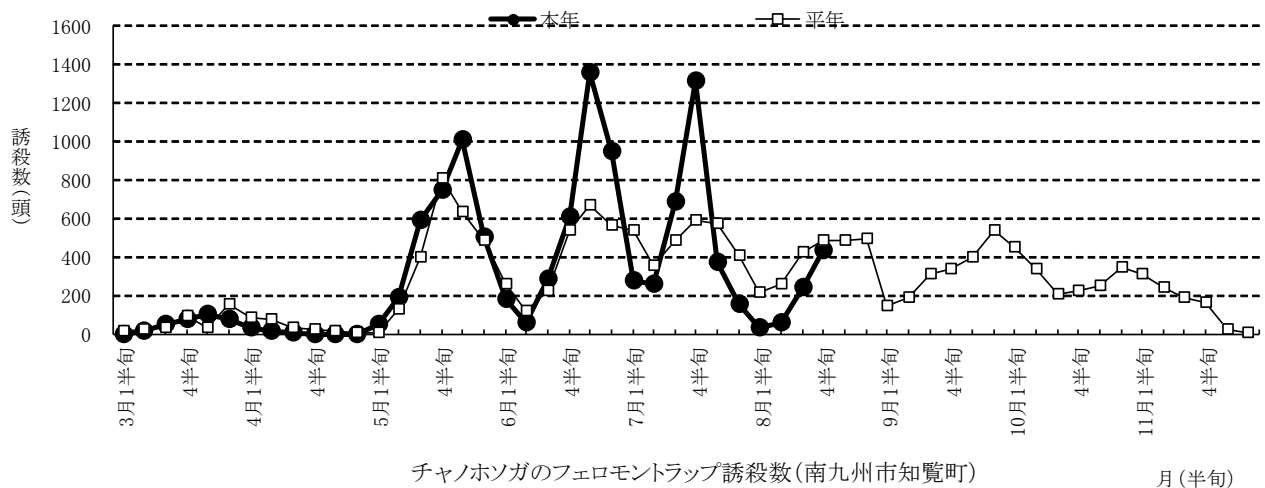
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 巻葉してからの防除は効果が劣るので、適期防除に努める。

(イ) IGR剤及びジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。



チャノホソガの発生ほ場率とm²当たり巻葉数



(5) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ 多
 チャノキイロアザミウマ 多

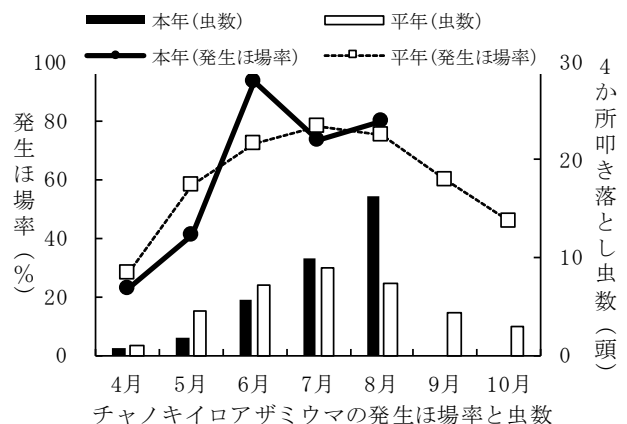
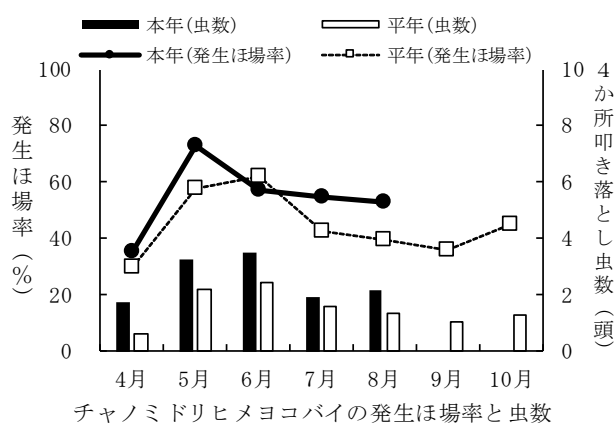
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	やや多	やや多
発生ほ場率	52% (平年40%) : やや高い (+)	80% (平年 75%) : やや高い (+)
虫数(4か所叩き落とし)	2.2頭 (平年1.3頭) : 多 (+)	16.3頭 (平年7.4頭) : 多 (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) チャノミドリヒメヨコバイの秋芽被害は翌年の一番茶への影響が大きいため、秋芽生育期に防除する。
 (イ) 更新園や幼木園では、新芽の伸長期間が長いいため被害が継続し、樹体への影響も大きいため、芽の生育状態に合わせた防除を心がける。

(6) カンザワハダニ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

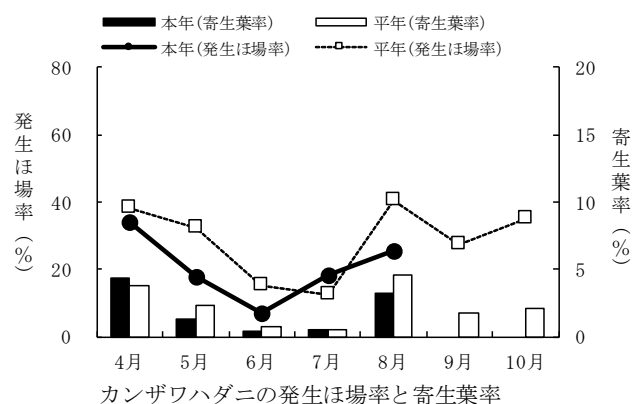
- (ア) 調査結果 発生量：やや少
 発生ほ場率 26% (平年 41%)
 : やや低い (-)
 寄生葉率 3.2% (平年4.6%) : 並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 天敵の活動が活発になる時期なので、防除する場合は天敵に影響の少ない薬剤を使用する。
 (イ) 更新園では秋芽生育期に多発することがある。



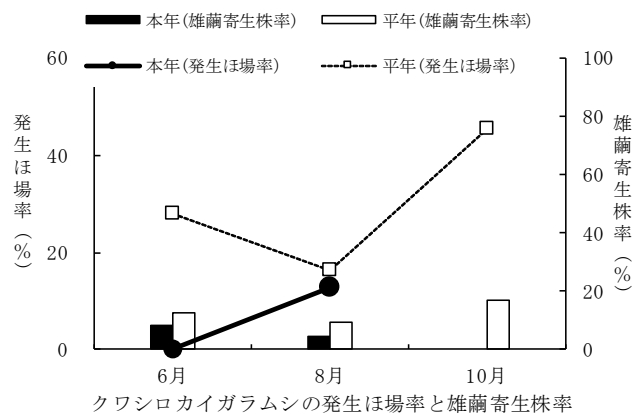
(7) クワシロカイガラムシ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少
- (ウ) 発生時期 早い

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率13%（平年16%）
：やや少（－）
- 雄繭の寄生株率4.6%（平年9.2%）
：やや低い（－）



(イ) 有効積算温度による防除適期（第三世代ふ化最盛期）予測

地 点	ふ化最盛期		
	本年	前年	平年
枕 崎	8月20日	8月30日	8月28日
加 世 田	8月25日	9月3日	9月1日
さつま柏原	9月9日	9月17日	9月18日
溝 辺	9月12日	9月14日	9月21日
鹿 屋	8月29日	9月5日	9月6日
志 布 志	9月1日	9月5日	9月9日

注1) 予測には各地のアメダス観測地点における本年の日平均気温を用い（8月23日まで）、8月24日以降は各観測地点の平年値を用いた。

2) 有効積算温度は各地のアメダス観測値より算出した第二世代ふ化最盛日の翌日を起算日として積算した。

3) 高温による発育遅延を考慮し、最高気温が31.5℃以上の日は日平均気温に0.85を乗じて積算した。

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ふ化最盛日は地域によって差があるので、ふ化状況を調査し、ふ化最盛日を把握する。
- (イ) 薬剤は、ふ化最盛日から5日以内に枝や株元に十分かかるように散布する。
- (ウ) 更新園でのふ化最盛期の防除は、茶株内の枝幹へ薬液が付着しやすく、高い効果が期待できる。

防除に関する今月の留意事項

1. チャトゲコナジラミ

多発するとは場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

- (1) 裾刈りは、寄生葉が除去され密度低下が期待される。
- (2) 薬剤防除は若齢幼虫期の効果が高い。
- (3) 本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない薬剤を使用するように努める。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は，住宅地および畜舎に隣接するほ場や，無風の時，土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は，巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は，果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋），（－）は，発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は，向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い，本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし，過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。